まえがき

シンジルト　SHINJILT

濃い緑の草木にむけて両手を合わせ、オレンジ色の服を身にまとう男性の後ろ姿が飾る、この本の表紙をみたときに、読者のみなさんはいったい何を想像したのでしょうか。自然災害の多い日本で育った方にとっては、それは、おそらくなんらかの天災で亡くなった人間に対してレスキュー隊員が追悼の念を表しているように映ったのかもしれません。

しかしながら、実際、ここに広がっているのは、2017年秋頃の南九州の穏やかな山々であり、オレンジ色の服を着た男性はこの地域の猟友会のメンバーです。彼が手を合わせているのは、これから山に入って猟をするという行為それ自体に対する、その山の神のお許しを請うためです。まさに、猟師が肉を獲るため入山しようとするその瞬間なのです。

そうです。メインタイトルにもありますように、この本は、「狩猟肉」に関するものです。ここでいう「狩猟肉」とは、一般に市販されている豚や牛といった家畜の肉と違って、シカやイノシシなど野生動物を猟師が仕留め、解体して得られた肉のことを指します。

野生動物の肉といえば、ジビエを連想する読者はきっと多いかと思われます。しかし、本書の執筆者たちはジビエ料理の愛好家でもなければ、ジビエのことを念頭にいれて書いたわけでもありません。執筆者は熊本大学文学部の学生であり、本書は2017年度に学生が実習の一環として行った社会調査で得られたデータをもとに著された報告書です。

野生動物どころか動物一般とほとんど接点のない都市生活を送る多くの現代人たちにとって、狩猟肉のようなものを調べて、いったい何の役に立つのか？というような疑問をいだく読者もいるでしょう。確かに目先のことを強く意識し、常に「役に立つか否か」という物差しで物事の価値を判断しなければいけないのが、時間的にも精神的にも余裕を失いつつある大人たちの切実な現実なのかもしれません。

しかし、現代人といえども、大学生は、少なくともキャンパスライフを送っている限りにおいては、大人の価値観に拘束されず、より自由にまわりのものや出来事を注視したり、大人と異なるスパンで今後を展望したり、大人と異なるスタンスで夢を語ったりすることができます。その際「役に立つか否か」という物差しは必ずしも有用であるとは限りません。

人間のことしか研究対象にならぬ文学部において、当然、動物学を専攻する教員もいなければ、動物について体系的に学習する科目もありません。学生にとって動物に関する情報や知識などは、最初から専門とは無縁な領域に属していました。就活にはあまり役に立たないでしょうし、社会人になってからはおそらく語られることもほとんどないでしょう。

それにもかかわらず、否、専門ではないからこそ、狩猟肉にまつわる諸々の現象に対する受講生の好奇心は自然で純粋なるものでした。こうした好奇心は、命ある動物とものである肉、ものである肉と魂ある人間との相関関係を、一度くらいは真剣に考えてみたい、という学生の意外と真面目な関心から由来しているのかもしれません。

ともあれ、こうした好奇心あるいは関心が背景にあって、そこで生まれた意欲が原動力になったからこそ、前学期における膨大な文献研究に耐えきり、夏休みの終盤におけるハード

なスケジュールのなかで企画された現地調査も楽しく実施することができたのではないかと考えられます。調査の中において、ある陽気な学生がテンション高く述べた「こんなに楽しくやらせてもらって、本当に単位が取れるのか？！」という素朴な感想が、私には印象深く残っています。

文献研究と現地調査を経て、徐々に浮かんできたのが、まず、野生動物が具体的にどのように肉へとかわっていくのか、そして、その肉はいかなる人間関係を結んでいるのか、さらに、いわゆる人間の内面世界などはいかに肉の存在によって規定されているのか、という3つの問題群でした。これらの問題群の解明を試みるべく、現地調査で得られたデータを整理分析し、仕上げたのが、『狩猟肉の民族誌』と称するこの報告書です。

実は、2014年度に『狩猟の民族誌』と題する報告書が刊行されていました。そこで行われたのは、五木村を中心とする九州南部地域における狩猟実践それ自体の多様な側面に関する報告でした。その3年後の今回の報告書は、狩猟実践で獲られた「肉」に着目したものです。狩猟「肉」の役割や意味を強調したい執筆者たちの意図は、報告書のメインタイトルのみならず、「肉をつくる、肉がつなぐ、肉がつくる」というサブタイトルにおける「肉」表現の多用からも伝わってくることでしょう。受け身としてつくられ、そこに存在するだけではなく、諸々の人間関係の構築における肉の躍動ぶりを描き、さらに肉を主軸におき、いわば肉の目線から人間文化のダイナミックスを理解しようとする点においては、若い執筆者たちの試みはユニークであるといえましょう。

こうした試みを可能にしてくれたポジティブな要素は、大きくふたつあります。ひとつは「地」です。今回の報告書の舞台となったのは、熊本県南部の球磨郡の多良木町、湯前町、水上村です。この地域は、自然環境に恵まれ野生動物が豊かで狩猟に適しているだけではなく、全国で初めて野生鳥獣肉（狩猟肉）を扱った村上精肉店のような老舗を有し、さらに近年狩猟肉の解体処理場を新しく建設しています。狩猟肉を語る際、欠かせない地域です。

もうひとつは「人」です。この素晴らしい地域に、部外者の我々を無条件に受け入れてくださったのは、ほかならぬ熊本県猟友会上球磨支部が管轄する多良木分会、湯前分会、水上分会のメンバーおよび多良木町役場やその他の関連施設の方々です。彼らは、この地の主であると同時に、猟のプロでもあります。彼らは我々にとってはホストであると同時に、インフォーマントでもあります。彼らの経験と語りは、本報告書における我々のアイディアの源泉となっております。

こうした方々と出会えたのは、熊本県猟友会上球磨支部事務局長の石田博文さんおよび熊本県猟友会上球磨支部多良木分会長田和男さんのおかげでした。短期間で大勢の方と知り合えただけではなく、現地における調査チームの行動スケジュールの調整、宿の手配、学生たちの夢見ていた狩猟同行を可能にしてくださったのも、お二人でした。さらに、お二人そしてお二人を通じて、各分会やその他の関係者に、本報告書の草稿をご確認いただき、さまざまな側面からコメントをいただきました。ここで、お二人、そして、お世話になったすべての方々に、深くお礼を申し上げたいと存じます。誠にありがとうございました。

2018年3月19日

熊本大学・文学部・教授